

MfG_J_Bullfighting_in_Yamakoshi

牛の角突きのはじまりについて

山古志の牛の角突きの起源については、長岡郷土史研究家の滝沢繁氏による「山古志地域の色鯉と角突き」の調査報告(*1)、山古志発行の各種パンフレットなどにあるように、神事説や娯楽説など、いろいろな見方があるようですが、たまたま三余堂の藍沢南城さんの聞き語りの本(*2)を読み、その中にあった見方に、なるほどと思えるものがありましたので、ここに紹介します。

(*1) 滝沢繁、“山古志地域の色鯉と角突き(後)”、長岡郷土史46号(2009)

(*2) 郷、長谷川、福原、村山、“南城先生の越後奇談－『啜茗談柄』訳注”、汲古書院(2001)

目次

1. 二十村の闘牛 南城先生の越後奇談『啜茗談柄』訳注より
角突きのはじまりについて

2. 啜茗談柄 (せつめいだんぺい、茶のみ話)について

3. 本説の印象

参考 藍沢南城と三余堂

1. 二十村の闘牛 南城先生の越後奇談『啜茗談柄』訳注より

二十村の闘牛

長岡の南、四里（＝十六キロ）ばかり行ったところに金倉山という山がある。その金倉山の東の麓から山に入ったところは、奥深く静寂で、その趣はまるで中国の若耶山(じゃくやさん)中のようなものである。

人々は谷あいの耕作できる所に住みついて、田畑を耕したり、木を切り出したりして、生活は豊かなほうであった。十戸や二十戸の集落から四、五十戸の集落まで全部で二十箇所あまりあつて、それらを総称して二十村と呼んでいる。

村人が行き来したり、耕作したりする所は高い山を越えたり、深い谷を渡ったりしなければならない。その上、山道は陰しく、曲がりくねっていて、馬でははなはだ不都合だ。それでこの二十村では、どの家でも牛を飼って、いろいろと仕事に使っている。ところが、牛は陰しい道を歩き、遠くまで行くたびに息を切らして汗だくになって動こうとしなくなる。だから、牛同士が行き遭うと、道を譲ろうとせず、時にはけんかとなり、傷つけ合ったり、殺し合いに及ぶことさえあつた。困った末に村人たちは、毎年春、農作業が始まる頃に村中の牛を集め、角を突き合わせて闘わせ、牛の優劣を決めることにした。いったん優劣が決まると、道でばつたり出遭った時も、負けた牛は相手を避けて道を譲った。その様子はまるで身分の下の方が上の者に行う礼儀と同じであつた。飼い主の手を煩わすこともなかった。そこで人々は競って、大きくて力の強い牛を求めて飼ったという。

私はこう考える。さまざまな随筆記録類によると、義のある牛は飼い主を災難から救い、また復讐してやるともいう。ところで、今この話で負けた牛が勝った牛に道を譲るというのは、思うに、それもまた義から出たものであつて、決して脅しによってではないのである。『有子』に「仁義のようなものは鳥や獣にもある」とあるのは、このことを言うのであろうか。

【原文】 闘牛会記

長岡之南三十里有山、日金倉。從金倉之東麓而入、幽速窈窕、如入若耶山谷。民就溪澗可映之地背宅蔭。農樵之業不乏。其衆落十戸二十戸至四五十戸、凡二十有余所。統名之日二十郁。其所往来種作、險嶺度谷回徑崎嶇、不便馬蹄。故每戸畜牛、以服其勞。牛常歷險致遠、嚙汗惜步。故道途相遇、東西不相避、或至鬪相殺傷。民懲悔之、每春農時、先会閭鄉之牛、鬪其角以判牛之優劣。優劣一判、則及道途相遇、劣者先遷蹄讓途、如貴賤之礼。不煩牛主之叱。民由是、競求牛之肥大多力者而畜之云。 闘牛之期、必於土膏発動之候。先期一月、每日飯牛、以其所嚙。雷壯肥脂以要共鬪而勝。...

尚、本書は、伝えられている数種の原文の正統性を調査し、さらに現代語に翻訳した労作で、4人の著者は、現役の高校の先生であり、うち3名は発刊当時、長岡高校の教諭である。

.

2. 啜茗談柄 (せつめいだんぺい)について

越後南城の儒者藍沢南城(1792-1860)が書いた漢文小説集。
(茶のみ話)

～講学の余暇、先生が茶を喫しつつ、各地から集まっている門生たちに、それぞれ郷里で見聞したことを挙げさせ、これを筆記したものです。中国近世の筆記小説の流れを汲む作品のひとつです。
南城先生は文政から万延の世にかけて越後の国刈羽郡にあつて私塾「三余堂」を設け、研学と教育に生涯を捧げたひとであり、『啜茗談柄』の素材は農村や真宗寺院などの出身である塾生から入ったものを選択したと思われます。

~~~~~

### 3. 本説についての印象

滝沢繁さんの“山古志地域の色鯉と角突き(後)”では、駆られていた牛同士を余暇に角を突き合わせ、楽しんだのが始まりとしながら、村内の狭い道々行き来に、いがみ合う日ことなく通れるよう、調整と統率のために行なうという理由もあった、と書かれています。

実際、テレビの動物番組でも、ライオンが自分の縄張りを確保するため、侵入者と激しい戦いをし、負けたほうが服従し、その場を去ることが自然の習わしとされています。啜茗談柄でも、「いったん優劣が決まると、道でばつたり出遭った時も、負けた牛は相手を避けて道を譲った。その様子はまるで身分の下の方が上の者に行う礼儀と同じであつた。飼い主の手を煩わすこともなかつた。」というように云われています。やまこしの農業用の牛も、そうだったのではないかと、思う次第です。jそのような始まった牛の強弱の勝負が、山村の厳しく苦しい生活を一時的に解放するための娯楽として、盆や十五夜などの生活の節目にあわせて行われ、さらに娯楽以上の意味を担った祭りの場、神事ともして続けられるようになったといえると思うのです。

## 参考 藍澤南城と三余堂

三余堂は、長善館と並び称された江戸期越後の代表的漢学塾です。小国横沢の山口権三郎、恭八郎(後の互尊翁 野本恭八郎)らの兄弟も学びました。以下に、ネットからの情報を転記しました。

<http://sophia.city.kashiwazaki.niigata.jp/siraberu/nanjo/sanyodo.htm>

藍澤南城は、名を祇、字を子敬、通称を要輔とい寛政四年(一七九二)、三島郡片貝村(さんとうぐん・かたかいむら＝現在小千谷市)の朝陽館教授であった藍澤北溟(仲明)の長男として生まれた。

同九年、父が病没したため、母の郷里である刈羽郡南条村(かりわぐん・みなみじょうむら＝現在柏崎市)に移った。

その後、一時朝陽館に学んだが、十五歳の時に江戸に出て、父と同門の松下一斎(葛葵岡＝かつきこう)の葛山塾で折衷学を学んだ。

文政二年(一八一九)郷里に戻り、翌年、学塾をこの地に開き、三餘堂(さんよどう)と名付けた。三餘とは、年の餘りの冬、日の餘りの夜、時の餘りの陰雨を学問の好機とするという意味で、在野の儒学者として、生きた南城の考え方を端的に表した言葉といえる。

南城の質実な学風、厳格な教えが人々に慕われて、越後の諸郡からもとより、会津・能登・備前等からも門人が参集した。文政三年より万延元年(一八六〇)までの門人録には、七二三名の門人が記されていて後年、三餘堂は明治政府から蒲原郡栗生津村(あおうずむら＝吉田の長善館(ちょうぜんかん)と並び、北越の文教を振興した「私学の双璧」と認められた。(なお、「長善館学塾資料」は昭和四十二に県文化財に指定されている)。

詩を好んだ南城は、生涯に二、〇〇〇編に及ぶ詩作を試みた。その内から精選されたものが、上下二巻の『南城三餘集』として三餘堂から刊行されている。開塾以来、ほとんど南条の地を離れずに教育に没頭した南城万延元年(一八六〇)、六九歳で没した。

南城没後、三餘堂は養子朴斎(ぼくさい・名はよしなか＝美中)によって引き継がれた。その後、明治五年(一八七二)、学制の公布に伴い塾は閉鎖されたが、南城の孫の雲岫(うんしゅう・名はけいいち＝敬一)は再興を期して、明治二十七年四月に藍澤義塾を発足させた。藍澤義塾は明治三十年まで続いた。